

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平7-325375

(43)公開日 平成7年(1995)12月12日

(51)Int.Cl. ⁶	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
G 0 3 C 7/38				
// C 0 7 D 498/04	1 0 3			

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 10 頁)

(21)出願番号 特願平6-118754

(22)出願日 平成6年(1994)5月31日

(71)出願人 000001270

コニカ株式会社

東京都新宿区西新宿1丁目26番2号

(72)発明者 石井 文雄

東京都日野市さくら町1番地コニカ株式会
社内

(54)【発明の名称】 写真用カプラー

(57)【要約】

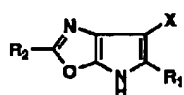
【目的】 熱・湿気および光に起因する色相の変化を起こさない色画像を形成できる写真用カプラー及びハロゲン化銀カラー写真感光材料の素材として用いられる写真用カプラーの提供。

【構成】 1. ピロロ [3, 2-d] オキサゾール類またはピロロ [2, 3-d] オキサゾール類で表される写真用カプラー。

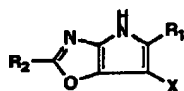
2. 上記写真用カプラーが下記一般式〔I〕又は一般式〔II〕で表されることを特徴とする前記1記載の写真用カプラー。

【化1】

一般式〔I〕



一般式〔II〕



〔式中、R₁、R₂、は水素原子または置換基を表し、Xは水素原子または発色現像主薬の酸化体との反応により離脱しうる基を表す。〕

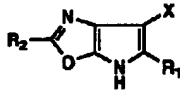
【特許請求の範囲】

【請求項1】 ピロロ (3,2-d) オキサゾール類またはピロロ (2,3-d) オキサゾール類で表される写真用カプラー。

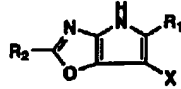
【請求項2】 上記写真用カプラーが下記一般式〔I〕又は一般式〔II〕で表されることを特徴とする請求項1記載の写真用カプラー。

【化1】

一般式〔I〕



一般式〔II〕



〔式中、R₁、R₂、は水素原子または置換基を表し、Xは水素原子または発色現像主薬の酸化体との反応により離脱しうる基を表す。〕

【請求項3】 前記写真用カプラーがハロゲン化銀カラー写真感光材料に使用されることを特徴とする請求項1、2記載の写真用カプラー。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は熱・湿気および光に対する堅牢性が優れている色素画像を形成できる写真用カプラーに関し、更に詳しくはハロゲン化銀カラー写真感光材料の素材として用いられる写真用カプラーに関するものである。

【0002】

【従来の技術】 一般に、カラー写真を製造する場合には、ハロゲン化銀カラー写真感光材料（以下、単に感光材料ともいう）に露光を与えた後、これを発色現像処理すると、その露光領域において、酸化された芳香族第一級アミン発色現像主薬と色素形成カプラーとが反応して色素を生成し、色画像が形成されるが、このような写真方法においては減色法による色再現法が使用され、それによってイエロー、マゼンタおよびシアンの各色画像が形成される。

【0003】 従来、上記のイエロー色画像を形成させるために用いられる写真用カプラーとしては、例えばアシルアセトアニリド系カプラーがあり、またマゼンタ色画像形成用のカプラーとしては、例えばピラゾロン、ピラゾロベンズイミダゾール、ピラゾロトリアゾールまたはインダゾロン系カプラーが知られており、さらにシアン色画像形成用のカプラーとしては、例えばフェノールまたはナフトール系カプラーが一般的に用いられており、これらのカプラーから得られる色素画像は、長時間光に曝されても、また高温、高湿下に保存されても変褪色しないことが望まれている。

【0004】 しかしながら、シアン色素を形成するためのカプラーとして、これまでに研究・実用化が進められてきた上記フェノール系カプラーおよびナフトール系

カプラーは、形成されたシアン色素画像の分光吸収特性、耐熱性および耐湿性等の点で今一つ不十分であり、したがってこれの改良をめざして、カプラー中の置換基の選択、探求をはじめとして、従来種々の提案がなされているが、これらの特性に関するすべての要求を満足するようなカプラーは未だ発見されていない。

【0005】 一方、マゼンタ色画像形成カプラーとして従来広く実用に供され、また研究されてきた5-ピラゾロン系カプラーから形成される色素は、熱および光に対する堅牢性については優れているものの、黄色成分に色濁りの原因となる不要吸収を有するので、これを解決するために、ピラゾロベンズイミダゾール、インダゾロン、ピラゾロトリアゾール、イミダゾピラゾール、ピラゾロピラゾール、ピラゾロテトラゾール系等のカプラーが提案され、事実これらのカプラーは色再現性の点からみると好ましいものであるけれども、そのカプラーから形成される色素は光に対する堅牢性が著しく低く、変褪色を起こし易いという問題がある。

【0006】 そこで本発明者等は、このような状況に鑑みてさらに研究を進めた結果熱・湿気および光に対して色相変化を起こさない色素画像を形成できる写真用カプラーを見出した。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】 したがって、本発明の課題は、上記問題を鑑み、第一は熱・湿気および光に起因する色相の変化を起こさない色画像を形成できる写真用カプラーを提供することにある。第二はハロゲン化銀カラー写真感光材料の素材として用いられる写真用カプラーを提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】 本発明の上記課題は、以下の構成により達成される。

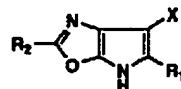
【0009】 1. ピロロ (3,2-d) オキサゾール類またはピロロ (2,3-d) オキサゾール類で表される写真用カプラー

2. 上記写真用カプラーが下記一般式〔I〕又は一般式〔II〕で表されることを特徴とする前記1記載の写真用カプラー

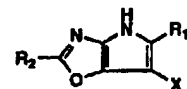
【0010】

【化2】

一般式〔I〕



一般式〔II〕



【0011】 〔式中、R₁、R₂、は水素原子または置換基を表し、Xは水素原子または発色現像主薬の酸化体との反応により離脱しうる基を表す。〕

3. 前記写真用カプラーがハロゲン化銀カラー写真感光材料に使用されることを特徴とする前記1、2記載の写

真用カブラー

以下、より具体的に本発明を説明する。

【0012】前記一般式〔I〕又は一般式〔II〕において、 R_1 、 R_2 の表す置換基としては特に制限はないが、代表的には、アルキル、アリール、アニリノ、アシルアミノ、スルホンアミド、アルキルチオ、アリールチオ、アルケニル、シクロアルキル等の各基が挙げられるが、この他にハロゲン原子及びシクロアルケニル、アルキニル、複素環、スルホニル、スルフィニル、ホスホニル、アシル、カルバモイル、スルファモイル、シアノ、アルコキシ、アリールオキシ、複素環オキシ、シロキシ、アシルオキシ、スルホニルオキシ、カルバモイルオキシ、アミノ、アルキルアミノ、イミド、ウレイド、スルファモイルアミノ、アルコキシカルボニルアミノ、アリールオキシカルボニルアミノ、アルコキシカルボニル、アリールオキシカルボニル、複素環チオ、チオウレイド、カルボキシ、ヒドロキシ、メルカプト、ニトロ、スルホ等の各基、ならびにスピロ化合物残基、有橋炭化水素化合物残基等も挙げられる。

【0013】以下、 R_1 、 R_2 で表される各基において、アルキル基としては、炭素数1～32のものが好ましく、直鎖でも分岐でもよい。

【0014】アリール基としては、フェニル基が好ましい。

【0015】アシルアミノ基としては、アルキルカルボニルアミノ基、アリールカルボニルアミノ基等が挙げられる。

【0016】スルホンアミド基としては、アルキルスルホニルアミノ基、アリールスルホニルアミノ基等が挙げられる。

【0017】アルキルチオ基、アリールチオ基におけるアルキル成分、アリール成分は上記 R_1 、 R_2 で表されるアルキル基、アリール基が挙げられる。

【0018】アルケニル基としては、炭素数2～32のもの、シクロアルキル基としては炭素数3～12、特に5～7のものが好ましく、アルケニル基は直鎖でも分岐でもよい。

【0019】シクロアルケニル基としては、炭素数3～12、特に5～7のものが好ましい。スルホニル基としてはアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基等；スルフィニル基としてはアルキルスルフィニル基、アリールスルフィニル基等；ホスホニル基としてはアルキルホスホニル基、アルコキシホスホニル基、アリールオキシホスホニル基、アリールホスホニル基等；アシル基としてはアルキルカルボニル基、アリールカルボニル基等；カルバモイル基としてはアルキルカルバモイル基、アリ

ールカルバモイル基等；スルファモイル基としてはアルキルスルファモイル基、アリールスルファモイル基等；アシルオキシ基としてはアルキルカルボニルオキシ基、アリールカルボニルオキシ基等；スルホニルオキシ基としては、アルキルスルホニルオキシ基、アリールスルホニルオキシ基等；カルバモイルオキシ基としてはアルキルカルバモイルオキシ基、アリールカルバモイルオキシ基等；ウレイド基としてはアルキルウレイド基、アリールウレイド基等；スルファモイルアミノ基としてはアルキルスルファモイルアミノ基、アリールスルファモイルアミノ基等；複素環基としては5～7員のものが好ましく、具体的には2-フリル基、2-チエニル基、2-ピリミジニル基、2-ベンゾチアゾリル基、1-ピロリル基、1-テトラゾリル基等；複素環オキシ基としては5～7員の複素環を有するものが好ましく、例えば3,4,5,6-テトラヒドロピラニル-2-オキシ基、1-フェニルテトラゾール-5-オキシ基等；複素環チオ基としては、5～7員の複素環チオ基が好ましく、例えば2-ピリジリルチオ基、2-ベンゾチアゾリルチオ基、2,4-ジフェノキシ-1,3,5-トリアゾール-6-チオ基等；シロキシ基としてはトリメチルシロキシ基、トリエチルシロキシ基、ジメチルブチルシロキシ基等；イミド基としてはコハク酸イミド基、3-ヘプタデシルコハク酸イミド基、フタルイミド基、グルタルイミド基等；スピロ化合物残基としてはスピロ〔3,3〕ヘプタン-1-イル等；有橋炭化水素化合物残基としてはビスクロ〔2,2,1〕ヘプタン-1-イル、トリシクロ〔3,3,1,1³']デカン-1-イル、7,7-ジメチル-ビスクロ〔2,2,1〕ヘプタン-1-イル等が挙げられる。

【0020】上記の基は、さらに長鎖炭化水素基やポリマー残基などの耐拡散性基等の置換基を有してもよい。

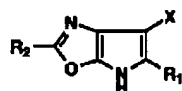
【0021】Xの表す発色現像主薬の酸化体との反応により離脱しうる基としては、例えばハロゲン原子（塩素原子、臭素原子、弗素原子等）、アルコキシ、アリールオキシ、複素環オキシ、アシルオキシ、スルホニルオキシ、アルコキシカルボニルオキシ、アリールオキシカルボニル、アルキルオキザリルオキシ、アルコキシオキザリルオキシ、アルキルチオ、アリールチオ、複素環チオ、アルキルオキシチオカルボニルチオ、アシルアミノ、スルホンアミド、N原子で結合した含窒素複素環、アルキルオキシカルボニルアミノ、アリールオキシカルボニルアミノ及びカルボキシル等の各基が挙げられるが、好ましくはハロゲン原子である。

【0022】次に本発明の代表的化合物例を以下に示すが、本発明はこれらに限定されるものではない。

【0023】

【化3】

一般式 (1)



化合物番号	X	R ₁	R ₂
I-1	Cl	CH ₃	
I-2	Cl	CH ₃	
I-3	Cl		-CH ₃
I-4	Cl	CF ₃	
I-5	Cl	CN	
I-6	Cl		CF ₃
I-7	Cl	CF ₃	
I-8	Cl	-SO ₂ CH ₃	

【0024】

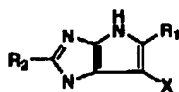
【化4】

化合物番号	X	R ₁	R ₂
I-9	Cl	CN	-CONHC ₁₀ H ₂₁
I-10	Cl	SO ₂ N(CH ₃)	
I-11	-O-	CH ₃	
I-12	-SCH ₂ CH ₂ OH	-CO ₂ C ₄ H ₉ (1)	
I-13		CN	
I-14	-N	CH ₃	

【0025】

* * 【化5】


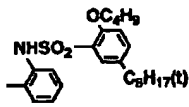
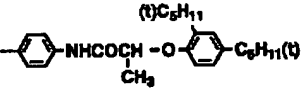

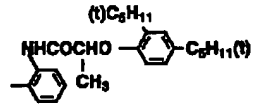
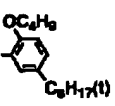


一般式(II)



化合物番号	X	R ₁	R ₂
II-1	Cl	CH ₃	
II-2	Cl	CH ₃	
II-3	Cl		
II-4	Cl	CN	
II-5	Cl	CN	
II-6	Cl	CF ₃	
II-7	Cl	CF ₃	
II-8	Cl	-SO ₂ CH ₃	

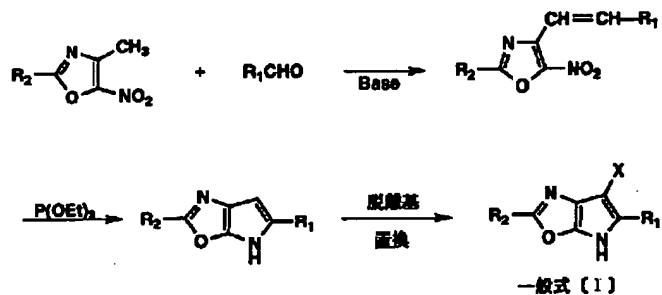
【0026】

【化6】

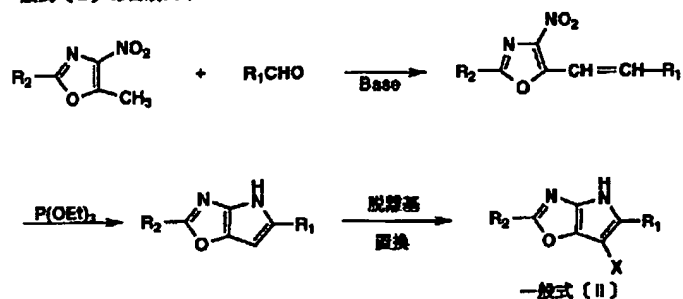
化合物番号	X	R ₁	R ₂
II-9	Cl	$-\text{CO}_2\text{C}_{13}\text{H}_{27}$	CN
II-10	Cl		
II-11	$-\text{O}-\text{C}_6\text{H}_4-\text{COOH}$	CH ₃	
II-12	$-\text{SCH}_2\text{COOH}$		
II-13		CH ₃	$-\text{NHCOC}_{13}\text{H}_{27}$
II-14		CN	

【0027】前記の本発明の写真用カプラーは以下の合 20* 【0028】
成スキームに従って合成することができる。 * 【化7】

一般式 (I) の合成スキーム



一般式 (II) の合成スキーム



【0029】本発明の写真用カプラーは通常ハロゲン化 2⁻²モル～8×10⁻¹モルの範囲で用いることができる。
銀1モル当り1×10⁻³モル～1モル、好ましくは1×10⁻²モル 50 【0030】また本発明の写真用カプラーは他の種類の

シアンカプラーおよびマゼンタカプラーと併用することもできる。本発明の写真用カプラーには、通常の色素形成カプラーにおいて用いられる方法および技術が、同様に適用される。

【0031】本発明の写真用カプラーには、いかなる発色法によるカラー写真形成用素材としても用いることができるが、具体的には、外式発色法および内式発色法が挙げられる。外式発色法として用いられる場合、本発明のカプラーはアルカリ水溶液あるいは有機溶媒（例えばアルコールなど）に溶解して、現像処理液中に添加し使用することができる。

【0032】本発明の写真用カプラーを内式発色法によるカラー写真形成用素材として用いる場合、本発明の写真用カプラーは写真感光材料中に含有させて使用する。

【0033】典型的には、本発明の写真用カプラーをハロゲン化銀乳剤に配合し、この乳剤を支持体上に塗布してカラー感光材料を形成する方法が好ましく用いられる。

【0034】本発明の写真用カプラーは、例えばカラーのネガおよびポジフィルム並びにカラー印画紙などのカラー写真感光材料に用いられる。

【0035】このカラー印画紙を初めとする本発明の写真用カプラーを用いた感光材料は、単色用のものでも多色用のものでもよい。多色用感光材料では、本発明の写真用カプラーはいかなる層に含有させてもよいが、通常は緑感光性ハロゲン化銀乳剤層または／および赤感光性ハロゲン化銀に含有させる。多色用感光材料はスペクトルの3原色領域のそれぞれに感光性を有する色素画像形成構成単位を有する。各構成単位は、スペクトルのある一定領域に対して感光性を有する単層または多層乳剤層から成ることができる。画像形成構成単位の層を含めて感光材料の構成層は、当業界で知られているように種々の順序で配列することができる。

【0036】典型的な多色用感光材料は、少なくとも1つのシアンカプラーを含有する少なくとも1つの赤感光性ハロゲン化銀乳剤層からなるシアン色素画像形成構成単位、少なくとも1つのマゼンタカプラーを含有する少なくとも1つの緑感光性ハロゲン化銀乳剤層からなるマゼンタ色素画像形成構成単位、（シアンカプラーまたは／およびマゼンタカプラーの少なくとも1つは本発明の写真用カプラーである。）少なくとも1つのイエローカプラーを含有する少なくとも1つの青感光性ハロゲン化銀乳剤層からなるイエロー色素画像形成構成単位を支持体上に担持させたものからなる。感光材料は、追加の層例えばフィルター層、中間層、保護層、下塗り層等を有することができる。

【0037】本発明の写真用カプラーを乳剤に含有せしめるには、従来公知の方法に従えばよい。例えばトリクレシルホスフェート、ジブチルフタレート等の沸点が175℃以上の高沸点有機溶媒または酢酸ブチル、プロピオ

ン酸ブチル等の低沸点溶媒のそれぞれ単独にまたは必要に応じてそれらの混合液に本発明のカプラーを単独でまたは併用して溶解した後、界面活性剤を含むゼラチン水溶液と混合し、次に高速回転ミキサーまたはコロイドミルで乳化した後、ハロゲン化銀に添加して本発明に使用するハロゲン化銀乳剤を調製することができる。

【0038】本発明の写真用カプラーを用いた感光材料に好ましく用いられるハロゲン化銀組成としては、塩化銀、塩臭化銀または塩沃臭化銀がある。また更に、塩化銀と臭化銀の混合物等の組合せ混合物であってもよい。即ち、ハロゲン化銀乳剤がカラー用印画紙に用いられる場合には、特に速い現像性が求められるので、ハロゲン化銀のハロゲン組成として塩素原子を含むことが好ましく、少なくとも1%の塩化銀を含有する塩化銀、塩臭化銀または塩沃臭化銀であることが特に好ましい。

【0039】ハロゲン化銀乳剤は、常法により化学増感される。また、所望の波長域に光学的に増感できる。

【0040】ハロゲン化銀乳剤には、感光材料の製造工程、保存中、あるいは写真処理中のカプリの防止、および／又は写真性能を安定に保つことを目的として写真業界においてカプリ防止剤または安定剤として知られている化合物を加えることができる。

【0041】本発明の写真用カプラーを用いたカラー感光材料には、通常感光材料に用いられる色カプリ防止剤、色素画像安定化剤、紫外線防止剤、帯電防止剤、マット剤、界面活性剤等を用いることができる。

【0042】これらについては、例えばリサーチ・ディスクロージャー（Research Disclosure）176巻、22~31頁（1978年12月）の記載を参考にすることができる。

【0043】本発明のカプラーを用いたハロゲン化銀カラー写真感光材料は、当業界公知の発色現像処理を行うことにより画像を形成することができる。

【0044】本発明の写真用カプラーを用いたハロゲン化銀カラー写真感光材料は、親水性コロイド層中に発色現像主薬を発色現像主薬そのものとして、あるいはそのプレカーサーとして含有し、アルカリ性の活性化浴により処理することもできる。

【0045】本発明の写真用カプラーを用いたカラー写真感光材料は、発色現像後、漂白処理、定着処理を施される。漂白処理は定着処理と同時に進めてもよい。

【0046】定着処理の後には、通常は水洗処理が行われる。また水洗処理の代替えとして安定化処理を行ってもよいし、両者を併用してもよい。

【0047】

【実施例】次に本発明を実施例によって具体的に説明するが、本発明はこれらに限定されるものではない。

【0048】実施例1

ポリエチレンで両面ラミネートされた紙支持体上に下記の各層を支持体側より順次塗設し、赤色感光性カラー感光材料試料1を作製した。尚、化合物の添加量は特に断

りのない限り1m²当りを示す(ハロゲン化銀は銀換算値)。

【0049】第1層:乳剤層

ゼラチン1.2g、赤感性塩臭化銀乳剤(塩化銀99.5モル%含有)0.35gおよびジオクチルホスフェート0.50gに溶解した比較シアンカブラーa 7.5×10⁻⁴モルからなる赤感性乳剤層。

【0050】第2層:保護層

ゼラチン0.50gを含む保護層。尚、硬膜剤として2,4-ジクロロ-6-ヒドロキシ-s-トリアジンナトリウム塩をゼラチン1g当り0.017gになるよう添加した。

【0051】次に、試料1において比較カブラーaを表1に示すカブラー(添加量は比較カブラーaと同モル量)に代えた以外は、全く同様に、本発明の試料2*

(発色現像液)

純水	800ml
トリエタノールアミン	10g
N,N-ジエチルヒドロキシルアミン硫酸塩	5.0g
臭化カリウム	0.02g
塩化カリウム	2.0g
亜硫酸カリウム	0.3g
1-ヒドロキシエチリデン-1,1-ジホスホン酸	1.0g
エチレンジアミン四酢酸	1.0g
カテコール-3,5-ジスルホン酸二ナトリウム塩	1.0g
ジエチレングリコール	10.0g
3-メチル-4-アミノ-N-エチル-N-(β-メタンスルホンアミドエチル)アニリン硫酸塩	4.5g
蛍光増白剤(4,4'-ジアミノスチルベンスルホン酸誘導体)	1.0g
炭酸カリウム	27g

水を加えて全量を1000mlとし、pH10.10に調整する。 ※30※【0055】

(漂白定着液)

エチレンジアミン四酢酸鉄第2鉄アンモニウム2水塩	60.0g
エチレンジアミン四酢酸	3.0g
チオ硫酸アンモニウム(70%水溶液)	100.0ml
亜硫酸アンモニウム(40%水溶液)	27.5ml

水を加えて全量を1000mlとし炭酸カリウムまたは氷酢酸 ★【0056】
でpH5.7に調整する。 ★

(安定化液)

5-クロロ-2-メチル-4-イソチアゾリン-3-オン	0.2g
1,2-ベンズイソチアゾリン-3-オン	0.3g
エチレングリコール	1.0g
1-ヒドロキシエチリデン-1,1-ジホスホン酸	2.0g
0-フェニルフェノールナトリウム	1.0g
エチレンジアミン四酢酸	1.0g
水酸化アンモニウム(20%水溶液)	3.0g
蛍光増白剤(4,4'-ジアミノスチルベンスルホン酸誘導体)	1.5g

水を加えて1000mlとし、硫酸又は水酸化カリウムでpH 度計(コニカ株式会社製KD-7型)を用いて濃度を測定し、さらに、上記各処理済試料を高温・高温(60℃, 8

【0057】上記で処理された試料1~7について、濃 50 0%RH)雰囲気下に14日間放置し、色素画像の耐熱・耐湿

*~7を作製した。

【0052】上記で得た試料1~7は、それぞれ常法に従ってウェッジ露光を与えた後、次の工程で現像処理を行った。

【0053】(現像処理工程)

処理工程	温 度	時 間
発色現像	35.0±0.3℃	45秒
漂白定着	35.0±0.3℃	45秒
安定化	30~34℃	90秒
乾 燥	60~80℃	60秒

各処理工程において使用した処理液組成は、下記の如くである。

【0054】

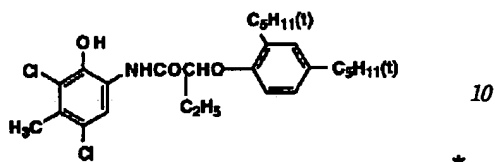
性を調べた。

【0058】結果を表1に示す。但し色素画像の耐熱性、耐湿性は初濃度1.0に対する耐熱、耐湿試験後の色素残存パーセントで表す。

【0059】

【化8】

比較カプラー a



*

試料No.	使用カプラー	色素残存率(%)
1	比較カプラー a	58
2	本発明例示1-4	82
3	＊ I-5	85
4	＊ I-7	86
5	＊ II-4	84
6	＊ II-5	81
7	＊ II-6	82

【0061】表1の結果から明かなように、本発明のカプラーを用いた試料は、比較カプラーを用いた試料に比べていずれも色素残存率が高く、高熱・高温におかれても褪色が起こり難いことがわかる。

【0062】実施例2

実施例1の試料1における赤感性塩臭化銀乳剤（塩化銀99.5モル%含有）0.35gに代えて緑感性塩臭化銀乳剤（塩化銀99.5モル%含有）0.35gを使用し、比較シアンカプラー a 9.1×10^{-4} モルに代えて下記に示す比較マゼンタカプラー b 及び本発明のマゼンタカプラー（表2に記載）をそれぞれ 7.5×10^{-4} モル使用した以外は実施例1と同様にして試料8～14を作成し、実施例1と同様の露光および現像処理を行った。

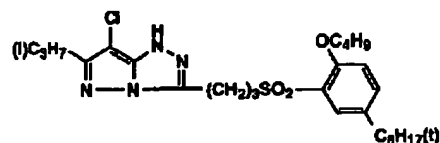
【0063】上記で処理された試料8～14について、濃度計（コニカ（株）製KD-7型）を用いて濃度を測定した。さらに、上記各処理剤試料を高温、高温（60℃、80℃RH）雰囲気下に12日間放置し、色素画像の耐熱、耐湿

性を調べた。得られた結果は表2に示す。但し、色素画像の耐熱、耐湿性は初濃度1.0に対する耐熱、耐湿試験後の色素残存パーセントで表す。

【0064】また各試料をキセノンフェードメーターで4日間照射した後、濃度測定し初濃度1.0に対する耐光試験後の色素残存率から色素画像の耐光性を調べた。結果を表2に示す。各処理済試料について、実施例1と同様にして耐熱・耐湿性を調べた。

【0065】

【化9】



【0066】

【表2】

試料No.	使用カプラー	色素残存率(%)	
		耐熱・耐湿性	耐光性
8	比較カプラーb	88	40
9	本発明例示I-1	92	57
10	＊ I-2	93	56
11	＊ I-3	95	55
12	＊ II-1	92	52
13	＊ II-2	94	54
14	＊ II-3	90	51

【0067】表2の結果から明らかなように、本発明の一般式(I)及び一般式(II)で表される写真用カプラーを使用した本発明の試料9～14は比較カプラーbを使用した比較試料に比して、耐光性が大幅に改良され、且つ耐熱、耐湿性も優れており、堅牢な色素画像を得られることが分かる。

【0068】

【発明の効果】本発明による写真用カプラーは、該カプラーから形成されるシアンまたはマゼンタ色画像は、熱、温度および光に対して堅牢であり、ハロゲン化銀カプラー写真感光材料に有用に使用することができる。